

バーチャル体験と看図アプローチを活用した 成人看護学の学内実習展開の試み

藤田医科大学 保健衛生学部 看護学科
成人看護学 織田 千賀子



covid-19対応の実習による学習上の課題とVR体験による実習の補填

状況：成人看護学実習（周手術・クリティカル）の制限

	covid-19前の通常の臨地実習	covid-19対応の臨地実習
周手術	2週間：病棟実習、手術室見学実習(0.5日) ※受持ち患者の手術による転棟に伴い、手術室、ICU・HCUで看護を経験する実習	1週間：病棟のみの実習（ICU・HCU・手術室での実習は不可） 1週間：学内実習
クリティカル	1週間：救命救急センターで、受持ち患者の看護の経験や見学をする実習	1週間：学内実習

- 課題：
- ・術直後～回復期に向けた看護の経験の機会を得られない
 - ・術直後やクリティカルな状況にある患者のイメージの困難
 - ・手術侵襲による生体反応・合併症は机上の空論のような認識

VR学習の目的：臨床現場を学内へ移行させた見学のような実習ではなく、自分事(看護師)として状況をとらえ看護へ導く体験

1. 術後を含めクリティカルな状況にある患者のイメージ化
2. 既習知識（侵襲による生体反応や合併症）との関連付け
3. 患者の状況(非言語メッセージ) から臨床推論
4. 必要な看護について根拠に基づいた判断
5. 全体の状況とフォーカス部分を往還し、看護実践の思考
6. ICUや救命救急センターの構造的特徴の理解

結果：

看護実践の実施には至らないが、時間をかけてリアルな体験することで、術直後やクリティカルな状況にある患者のイメージ化、臨床判断、現実味を帯びた生体反応・合併症の理解をすることができた。

バーチャル体験と看図アプローチによる実習補填の実際

ヘッドマウントディスプレイとPCを往還するVR体験から患者の状況を読み解き、あたかもICUで看護をしているような体験学習



バーチャル体験に看図アプローチの技法を活用して、クリティカルな状況にある患者の状態を丁寧に**読み解き**、アセスメントし必要な看護について判断する。
※看図アプローチ：ビジュアルテキスト(写真や絵図)を「見る」ではなく「読むもの」として読み解いていく学習法

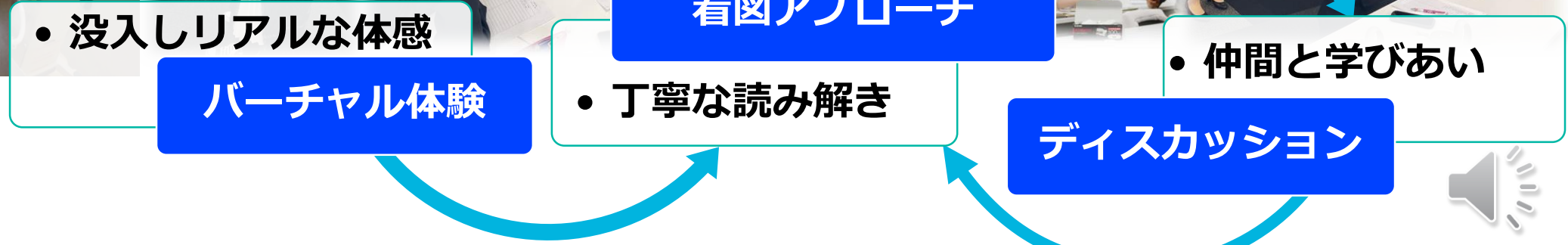
症例イメージ



ヘッドマウントディスプレイ



PCなどの端末



共有・討論

5.全体交流・振り返り

相互交流により更に視野を広め、ビジュアルテキストと学習内容を根拠に説明して討論していた。



発見・探究

4.言語化(文章化)

必要な観察と看護援助、留意点

既有知識に現実の状況を重ねて新たに気づき、視野を広げて、更に探求して看護を思考していた。

【学生の感想】

- ・1枚の写真だけでも気づきや疑問から学びが深まった。
- ・「判断と予測が大事」の重要性がよくわかった。
- ・事故抜去や急変に注意してできる技術や管理を身につけたい。
- ・実際ICUにいる臨場感があり、リアルに重症観が伝わってきた。
- ・リアルな体験で、家族のことにハッとし、家族看護も大切だと感じた。
- ・仲間と一緒にだから、細かいところまでみて発見できた。

【教員の見解】

変換で、教員のサポートを必要とする学生もいるが、その状況に没入でき鮮明に見えることで興味・関心を高める。また、「わかる部分」や「曖昧さ」がや知的好奇心を高めたと考える。さらに、「拡大でみえる」「検索によりわかる」ことで学習の見通しが立ち、発見に喜びながら、仲間と学び合っていた。

検索・想起

3.外挿(ビジュアルにな
いものを推測)

- ①患者の状態について根拠づけて説明
- ②装着していると考えられる物とその理由

- ①細部までみて曖昧な部分を明らかにし、情報を結び付けて患者の状態を判断していた。
- ②既有知識と関連付けて装着物を予測していた。



知的好奇心

2.要素関連付け
(既有知識と関連付け)

装着(使用)している根拠や目的

実習経験や既有知識を活用し、検索と「変換」に戻り思考し、根拠・目的の具現化をしていた。理解の浅さに気づきながら、知識と知識を結び付けていた。



興味・関心

1.変換(要素の言語化)

患者に装着(使用)しているルート・機器(物品) 20個以上の名詞

実習経験や既有知識を想起する一方、知識不足を実感していた。ネット検索などを駆使して、新たに発見していた。



驚き

症例をみる

看図アプローチの学習過程と学習内容

- 学習プロセス
- 看図アプローチ1~4
- 学習課題
- 学生の学習状況